

## 高木家一族高木貞秀の家系について

### Introduction of Takagi Sadahide families' historical book

名古屋大学附属図書館研究開発室  
Nagoya University Library Studies

長 屋 隆 幸  
NAGAYA, Takayuki

#### Abstract

In the Edo period, there was a house in the Kaga clan, dating from Takagi Sadahide. Takagi Sadahide is brother of three takagi families' first generation. Takagi Sadahide families' historical book are currently kept in Archives of Modern History Records in Tamagawa Library. This paper introduces this historical books. In addition, the Nishi Takagi family has compiled a number of historical books. Therefore, In this article followed the transition of the description of Takagi Sadahide in the Nishi Takagi families' historical book. Through this work, I clarified a part of the Nishi Takagi family's compilation of historical books.

#### Keywords

Takagi Sadahide (高木貞秀), historical books (由緒書), Nishi Takagi family (西高木家)

## はじめに

江戸時代、加賀藩家中に高木勘解由貞秀を祖とする家（以下、便宜的に高木勘解由家と記載）があった。この家の初代高木貞秀は、江戸時代に美濃国上石津郡多良郷宮村に陣屋を置き、時郷のすべてと多良郷の一部を領有した高木三家の系譜に連なる人物である。高木三家とは、高木貞利を祖とし知行二三〇〇石を領した西高木家、同貞友を祖とし知行一〇〇〇石を領した東高木家、同貞俊を祖と同じく知行一〇〇〇石を領した北高木家の三家からなる。三家は、知行地に居住し参勤交代を行う交代寄合と呼ばれる格式を許された旗本で、交代寄合美濃衆と呼ばれた。

貞秀は、この高木三家の初代貞利・貞友・貞俊の兄弟（貞利の弟、貞友・貞俊の兄）にあたる人物である。今回、この高木勘解由家の由緒書が金沢市立玉川図書館近世史料館に残されていることがわかった。本稿ではこの高木勘解由家の由緒書を紹介し、高木三家から枝分かれして加賀藩士となった貞秀の家系がどのように江戸時代を過ごしたかみてゆきたい。

また、名古屋大学附属図書館所蔵の高木家文書を始めとする西高木家に伝来してきた文書群<sup>1</sup>には、何点かの「先祖書」という名を持つ由緒書や系図の類などが残されている。『高木家文書目録』の解題によれば、名古屋大学附属図書館所蔵高木家文書に含まれる「先祖書」は八代当主高木貞臧まで記載した寛政三（一七九一）年成立のものと、九代経貞まで記載した弘化三（一八四六）年作成のものに別れ、後者は幕府からの種々の質問に基づいて内容が増し、西高木家初代貞利の父貞久や貞利自身についての記載部分には多数の史料が引用されているとされる。また、石川寛氏により、高木貞臧などが高木家の歴史編纂に使用するために準備した史料群黒漆文庫・白木桐箱文書の復元がなされている。しかし、現状では西高木家の由緒書編纂の実像については不分明な状況に留まっている。

石川氏は、「高木家が時・多良両郷に入郷し、三家が分立するに至った経緯については系譜編纂における最大の焦点であり、本家末家

に関わる問題として三家間で論争にもなった」とし、この問題を踏まえて高木家の系譜編纂の取り組みのようにして解明する必要性を主張されている。

そこで、本稿では高木勘解由家の由緒書と西高木家の由緒書類を使い、江戸時代における西高木家側の高木貞秀に対する認識の変遷に焦点を当て、極わずかではあるが西高木家の由緒書編纂の取り組みの一端を確認すると共に、由緒書における三家分立期頃に関する記述がいかなる経緯を経て構築されていたのかについて一例を示したいと思う。

### 高木勘解由家由緒書「先祖由緒并一類附帳」

金沢市立玉川図書館近世史料館に残されている高木勘解由家の由緒書は、現在二点存在している。一点は、明治三年に加賀藩士としては最後の当主となった高木孝七久教が、金沢藩士族長へ提出した由緒書「明治三年 先祖由緒一類附帳」<sup>2</sup>（以下、便宜的に明治三年本と記載）である。明治元（一八六八）年に維新政府により示された藩治職制や翌明治二年の版籍奉還、またそれに伴う職制変更などによりこの頃各藩では制度が大きく変更される。加賀藩（金沢藩）も当然例外ではなく、明治元年十二月十五日に年寄・家老の名目を廃止し、執政・参政に改め、翌明治二年三月一日に藩政期以来の役名を一掃している。おそらく、このような状況に対応するにあたり藩士全体の履歴や家系を確認・把握する必要があり藩が藩士に由緒書の提出を求めたのではないかと推測される。

もう一点は、明治七（一八七四）年五月に久教が病死したのに伴い家督を継承した子息永太郎が、同年七月に石川県令内田政風へ提出した「明治七年七月 先祖由緒并一類附帳」<sup>3</sup>（以下、便宜的に明治七年本と記載）である。冒頭に姓名・年齢・家禄・居所・紋所といった永太郎自身に関する基本的な情報<sup>4</sup>が示し、その直後に「私儀士族高木久教長男御座候処、明治七年七月十日亡父家督無相違相続被 仰付候」とあるので代替わりに伴い届出として石川県へ提出されたものと思われる。

明治三年本と明治七年本を比較すると、相対的に明治三年本の方が詳細に記載されている。特に、久教自身と彼の父由三久忠について明治三年本は極めて詳細に記している。逆に、女性については基本続柄を示すにとどまり、名前は記されていない。明治七年本では、永太郎の母を含めそれ以前の当主の妻については名前が記されておらず明治三年本と同様である。しかし、永太郎の妹や従姉妹などについては名前が記されている。また、明治三年本では記載の無い氏神について明治七年本では椿原神社であると記している。永太郎が当時直接関わっている人的範囲に関しては、明治七年本の方が詳細に記述している。このような違いが両者にはあるが、紙幅の関係もあるので本稿では明治三年本のみ翻刻を掲載する。次に明治三年本の翻刻を示す。

(表紙)

「明治三年

先祖由緒一類附帳

孝七

高木小左衛門

給禄高

本国美濃、御藩出生四拾四歳

一百三拾俵六升壹合

高木小左衛門(原かひさる)原久教

定紋丸ノ内左違鷹ノ羽

居屋敷味噌蔵丁

私儀高木由三嫡子二御座候処、元治元年七月十日父由三儀隠居被仰付、家督無相違千石拝領被仰付、御馬廻組頭御用番支配江被指加、同二年二月十六日右組江組入被仰付、慶応二年二月廿四日式番弟守右衛門江御知行高千石之内百五拾石配知願之通被仰出、組外御番頭支配江被指加、同三年十月廿八日銃隊御馬廻二被仰付候、私儀慶応三年十一月廿三日京都守衛御用被仰付、同所江相詰罷在候処、度々蒙御意、同四年正月京都異変之節江州今津等御領所御取縮為御用同所江出張被仰渡罷越居候所、同月右御用被指止、河内国橋本駅関門御固所江出張被仰渡相詰罷在候処、同年三月交代被仰渡、京都江罷帰申候処、桂御所并今出川御門等御守衛御用被仰渡相勤罷在申候処、同年閏四月京都表御人減に付交代被仰渡、同月九日罷帰申

候、然所同廿三日於二御丸從(總頭)中納言様□来度々出張大儀被思召候、從御意之趣身当頭原七郎左衛門を以被仰出候、同月廿四日銃隊御馬廻御指番寄合御馬廻江被指加候之処、明治元年九月廿八日重而銃隊御馬廻江被指加候処、明治二年三月職制御改正二付三等上士被仰付、同年十月士族二被仰付、給禄百三拾俵六升壹合被下之候

一九世之祖父 高木先故勘解由源久知

権現様江御奉公申上、其後浪人仕罷在候処、元和二年十二月六日

微妙院様江被召出、御知行千石拝領被仰付、御使番被仰

付、寛永元年江戸御供仕罷越、於彼地同年六月病死仕候

一九世之祖母 高木故藤兵衛娘

於美濃嫁娶仕候由伝承仕候、委細之儀相知不申、承応二年十月病死仕候

一八世之祖父 高木故勘解由源久明

(總頭)微妙院様御代亡父勘解由為跡目寛永元年十二月廿八日被召出、遺

知千石無相違拝領被仰付御馬廻組被仰付、延宝七年五月病死仕候

一八世之祖母 西村故右馬之助娘

慶安二年八月病死仕候、右馬之助義御旗奉行相勤罷在候由伝承仕候

一七世之祖父 高木先故庄兵衛源久通

(總頭)松雲院様御代亡父勘解由為跡目延宝七年十一月廿七日被召出、遺

知千石無相違拝領被仰付、御馬廻組二罷在、天和二年九月病死仕候

一七世之祖母 西村故右馬之助孫女

慶安五年七月病死仕候

一六世之祖父 高木故庄兵衛源久明

実者御馬廻頭二代目齊藤中務三男二御座候処、天和元年先故庄兵衛

娘江賀養子奉願候処、同年十二月六日願之通被仰出、(松雲院)

様御代亡養父庄兵衛為跡目同二年十二月十三日被召出、遺知千石

無相違拝領被仰付、御馬廻組二罷在、享保九年八月病死仕候

一六世之祖母 高木先故庄兵衛娘

宝永五年四月病死仕候

一五世之祖父 高木故源次郎源久輝

実者御馬廻頭脇田故七兵衛二男二御座候処、正徳二年二月廿二日故

庄兵衛娘江智養子奉願候処、同年六月廿九日願之通被 仰出、

護国院様御代亡養父庄兵衛為跡目享保九年十月廿八日被 召出、遣

知千石無相違拝領被 仰付、御馬廻組二罷在、御番相勤罷在候

処、七十歳二および行歩不自由二罷成候二付、寛延二年御番 御

赦免、せかれ代番之儀奉願候処、同年七月三日願之通被 仰出、宝

曆七年三月病死仕候

一五世之祖母 高木故庄兵衛娘

享保十四年五月病死仕候

一高祖父 高木故新左衛門源久信

泰雲院様御代亡父源次郎為跡目宝曆七年八月廿八日被 召出、遣知

千石無相違拝領被 仰付、御馬廻組二罷在、同八年五月病死仕候

一高祖母 御馬廻組脇田故治左衛門妹

御馬廻組脇田故九兵衛娘奉願縁組申合候処、寛保二年二月病死仕候

二付、右亡妻妹脇田故治左衛門妹再縁願之通被 仰出、嫁娶仕候

処、寛政十一年八月病死仕候

一曾祖父 高木故伊織源矩久

泰雲院様御代亡父新左衛門為跡目宝曆八年十二月廿三日被 召出、

遣知千石無相違拝領被 仰付、御馬廻頭支配二罷在候処、同十四

年二月十六日組入被 仰付、天明五年五月廿七日御普請奉行加人被

仰渡相勤罷在候処、同年九月廿五日右役儀 御免除被 仰付、寛

政六年七月廿二日火事之節盜賊改役被 仰付、文化三年五月病死仕

候

一曾祖母 御馬廻組脇田故哲兵衛姉

文政七年八月病死仕候

一祖父 高木故靱負源久義

実者御馬廻組齊藤故吉兵衛二男二御座候処、寛政五年十二月六日故

伊織娘江智養子奉願候処、同月廿七日願之通被 仰出、金龍院

様御代亡養父伊織為跡目文化三年十二月十六日被 召出、遣知千石

無相違拝領被 仰付、御馬廻頭支配二罷出候処、同五年閏六月廿

九日組入被 仰付、同九年十二月病死仕候

一祖母 高木故伊織娘

文化八年正月病死仕候

一父 高木由三源久忠

由三儀 金龍院様御代亡父靱負為跡目文化十年七月十一日被 召

出、遣知千石無相違拝領被 仰付、御馬廻頭支配二罷在、文政元

年六月廿六日組入被 仰付、同二年五月九日江戸表江暑気 御伺

御機嫌之御使被 仰付、同十年正月晦日御郡奉行改作方兼帶当分

加人被仰渡、同十二年五月廿五日右本役被 仰付、天保六年二月新

川郡神通川中嶋村領堰留取払之儀 淡路守様江御意味合等も有之

取払被 仰出候処、右堰取払方取捌不行届趣有之候二付、同七年正

月十七日役義被指除指控被 仰付、同年七月十一日指控 御免被

仰付、同九年二月巡見 上使御用中御郡奉行改作方兼帶当分加人

被仰渡、同五月十一日右御用無之旨被仰渡、同十二年六月廿八日魚

津町奉行奥田故喜兵衛代被 仰付、弘化三年二月十六日組外御番頭

大屋武右衛門代被 仰付、同年五月十七日 二御丸御広式御用被

仰付、嘉永元年八月十五日 榮操院様附物頭並今村清左衛門

代被 仰付、同年九月十二日 二御丸御広式向御省略方御用主附被

仰付、同三年十一月七日 御同所様御死去被遊候処、御葬送方

主附被 仰付、右御用相勤候二付、同十二月廿八日御染物二反拝

領被 仰付、同廿九日物頭並 二御丸御広式御用被 仰付、同四年

十二月十一日御留守居物頭今村清左衛門代被 仰付、同六年七月廿

六日御歩頭林源多郎代被 仰付、安政二年八月江戸表詰被 仰付、

於彼地詰中御省略方御用主附被 仰付、同三年春 御帰国二付

御留守中御用人壱人二候間、若故障等之節御用人可相勤旨被 仰

出、且又若御近火二而 姫君様御立退之節組頭代御供被 仰付

候条長屋七郎右衛門申談可相勤、将又組頭御使御用等有之候節者御

客方御用も可相勤旨被 仰出、相勤罷在候処、気配相滞御国江之

御暇奉願、同三年五月罷帰申候、同四年四月於大聖寺 諦獄院様

御三回忌御法事 懿香院様御三回忌御法事御取越御執行二付、

御両殿様御代香之御使者被 仰付、其節 眞龍院様 姫君様

茂松様 睦姫様之御代香茂被 仰付、夫々相勤申候、同年



十月廿八日新番頭中村部代被 仰付、時々御役料知 御□之通被下之、文久二年九月廿三日御省略奉行加人被 仰付、同年十一月十四日公方様御上洛二付来春 御上京被遊□筈、依之右御供被 仰付、御行列奉行被 仰付、同三年正月□日御省略方被指上御算用場<sup>カ</sup>江御附属被 仰付候条、右御用方夫々引送可申、然上者右御用

御免被成候段被仰渡、同月廿三日御行列奉行 御免被 仰付、御発駕御前後之内発足可仕旨被仰渡、同廿七日 御上京御道中御近習頭江加り騎馬御供被 仰付、二月十一日 御発駕御供仕罷越候处、足痛難儀仕候二付 御帰国之節御近習頭江加り騎馬御供之儀者御用捨被 仰付、三月十二日御供仕罷帰申候、然所同年八月六日

御上京被遊候二付、其節御供被 仰付候段被仰渡置候处、元治元年正月十七日御詮儀之趣有之、右御供御用捨被成候段被仰渡、同年七月十日未極老二者無之候得共、久々役儀相勤候に付隠居被 仰付、隠居料貳拾人扶持被下之、嫡子佐多丞江家督無相違千石拝領被 仰付、御馬廻組江被指加候、最初兵部与申候处由三与相改申候、明治二年職制御改正二付二等上士之列江被 指加、同年十月士族二被 仰付、給禄七拾三俵式升五合被下之候

一母 人持組菊池故大学養女

文政三年七月十三日父由三与縁組願通被 仰出、嫁娶仕候、実者仙石賢次郎等並前田左兵衛おは二御座候、萬延元年四月病死仕候

一妻 士族長瀬七左衛門養姉

実者御年寄中支配長瀬故善左衛門嫡子故喜太郎娘二御座候处、七左衛門父定番頭長瀬故七左衛門養女二仕、嘉永元年七月十四日縁組願之通被 仰出、嫁娶仕候、右七左衛門義隠居被 仰付、名如海与相改、慶応二年三月病死仕候

一嫡子 高木永太郎

一二男 高木鋪二郎

一娘 手前二罷在申候忝人

一惣領娘 士族津田虎三郎妻

明治元年十二月虎三郎与縁組願之通被 仰出、嫁娶仕候

一式番目弟 高木守右衛門

右守右衛門儀慶応二年二月廿四日私御知行高千石之内百五拾石配知

願之通被 仰付、組外御番頭御用番支配江被指加、同三年十月廿八日銃隊御馬廻被 仰付、明治二年三月職制御改正に付、三等上士被 仰付、同年十月士族二被 仰付、給禄高八拾八俵三斗六升被下之候

一指次実弟 士族久田喜次郎

実者父由三二男二御座候处、文久元年七月御大小将御番頭久田故義左衛門娘江智養子願之通被 仰出、同三年七月十一日亡養父義左衛門為跡目被 召出、遺知無相違三百五拾石拝領被 仰付候

父方 一おは 士族田辺九兵衛養母

文政十二年七月十三日右九兵衛養父故源兵衛与再々縁願之通被 仰出、嫁娶仕候、其後源兵衛義隠居被 仰付、名適齐与相改、文久二年九月病死仕候、右おは者父由三式番目妹二御座候

一実おい 久田喜次郎せかれ久田善太郎

一実めい 右同人手前二罷在候娘忝人

一めい 高木守右衛門手前二罷在候娘忝人

父方 一養いとこ 士族田辺九兵衛

実者新番頭内藤故十兵衛二男二御座候处、田辺故源兵衛養子願之通被 仰出候

母養方 一実いとこ 士族長尾八郎右衛門おち長尾求馬

求馬亡母者人持組菊池故大学娘二て私亡母之養方姉二御座候

母実方 一実いとこ 士族前田左兵衛

一同 一同 同前田源兵衛

実者前田左兵衛指次弟二御座候处、前田故牽次郎養子願之通被 仰出候

一同 同 金沢材木丁一向宗善福寺妻

右同人姉二御座候

母実方  
一実いとこ

士族 山崎作左衛門

作左衛門亡父山崎故典永斎義者私亡母之弟二而、実者前田左兵衛実  
おち二御座候

一同

山崎作左衛門弟 山崎幸次郎

一同

右同断 山崎伊之吉

一末家

高木守右衛門

一宗旨者一向宗、寺者金沢公儀町正福寺にて御座候

右私先祖由緒一類附如斯御座候、此外御藩・他藩共近き親類縁者無御  
座候、向後増減御座候之節書附を以御断可申上候、以上

明治三年十月

高木小左衛門（花押）<sup>⑨</sup>

士族長御中

右の明治三年本によれば、高木勘解由家の家紋は丸に左違鷹の羽である。これは、高木三家の表紋と同じである。

高木三家初代貞利・貞友・貞俊と兄弟であった貞秀は、通称を勘解由、諱は改名して久知と名乗っていたようである。彼は、家康に仕えた後、浪人し、大坂夏の陣の翌年である元和二（一六一六）年十二月六日に加賀藩三代藩主前田利常（微妙院）に知行一〇〇〇石で召し出され、使番に任じられている。ちなみに、元和四（一六一八）年以降成立の加賀藩分限帳には使番として「高木勘解由」と貞秀の名が確認できる。

貞秀が任じられた使番は、戦場で大将の命令を各部隊に伝える伝令や他領主への使者を勤める役職で、使役ともいう。馬廻などの一般の騎馬士よりも格式が高いのが通例である。後年の状況ではあるが文化十（一八一三）年成立の「国格類従」諸組御人高之御定条における御馬廻組十二組の内訳について記された箇所「一組三十五人位、但當時一組三十人計充、内御番頭一人、御使役一人、頭耆人充、但子弟・与力役、騎馬打込、一組六十騎之積り也」<sup>10</sup>とあり、当時の加賀藩では馬廻組において番頭に次ぐ地位に使番があったことが確認できる。江

戸前期でも同様だとすれば、利常は、貞秀の家康に仕えたとの経歴がある程度評価して召し抱えたものと推測される。なお、貞秀の妻について同由緒書では、美濃において高木藤兵衛の娘を娶ったとする。東高木家の祖貞友が藤兵衛を通称としているので、この記述が正しいとすれば貞秀は姪と結婚したことになる。現代の感覚では異に感じるが、近代に入るまで叔姪婚は普通に見られたとされるので、その一例と見ることができよう。

その後、高木勘解由家は、勘解由久明―庄兵衛久通―庄兵衛久明―源次郎久輝―新左衛門久信まで五代に渡り家禄一〇〇〇石を減らすことなく御馬廻組に属している。加賀藩の家臣団では人持組頭（万石以上八家）・人持・平士・与力・歩・足輕・小者の序列があった。与力までが騎馬士で、平士までが御目見以上であった。<sup>11</sup>人持は、騎馬士を数名抱える知行高を持つ大身家臣の家が入る格式で、おおよそ一〇〇〇石以上がこの人持に任じられた。ただし、藩政初期に軍団拡張のために武功のある歴々の者共を高禄で召し抱えて人持組に編成した関係上、平士からの昇進は稀であり、一〇〇〇石取りでも人持組の格式を与えられないことも少なくなかった。<sup>12</sup>貞秀が召し抱えられたのが大坂夏の陣が終わる戦乱の世に終止符が打たれた直後であったため、高木勘解由家は知行一〇〇〇石ではあったが人持組に任じられなかったであろう。

その後、高木矩久の代に普請奉行加人や火事の際の盗賊改めに任じられるも、その養子久義は馬廻組に所属するのみで一生を終えている。久義の子久忠は、優秀だったよう幕府への暑中見舞いの使者を皮切りに、郡奉行・魚津町奉行・広敷御用・物頭・省略奉行などを歴任している。その跡を継いだ久教は、馬廻に任じられ、明治維新を迎えて職制が改正されると三等上士に任じられている。

以上、由緒書を見る限りにおいて高木勘解由家は、歴代当主の大部分が馬廻を勤めるのみで生涯を終えている。久忠以外は特段出世する者もいなかったが、罪を犯して罰を蒙る者もおらず、家としては安定して江戸時代を過ごしたと見なすことができよう。

## 西高木家史料に見る高木貞秀

以上、高木勘解由家の由緒書を紹介した。次に西高木家の由緒書において高木貞秀についてどのように書いているのかその変遷から西高木家の由緒書編纂の一端を見てみることにしたい。

まず、貞秀と高木三家初代達との関係を、高木家に伝来した文政五（一八二二）年成立の「高木系譜」<sup>13</sup>から簡単に確認しておくことにする。同史料によれば、高木三家の祖先は八条院（鳥羽天皇娘。近衛天皇の姉）の判官代を勤めた信光なる人物で、彼が和泉国高木村に居住したことにより高木の苗字を名乗るようになったという。その子孫が伊勢国へ移り住み、同国の東側に住居した後、享祿元（一五二八）年九月下旬に美濃国石津郡徳田村へと移った。その後、高木貞政の代に斎藤道三の客分となり、石津郡駒野村の西にある舟岡山に駒野城を築いた。貞政は、嫡男貞次を早く亡くしたため、貞次の娘婿の貞久を養子に迎え跡を継がせた。貞久は、道三の子斎藤義龍に仕え、斎藤家が織田信長に滅ばされると信長へ仕え、信長から今尾城を与えられた。そこで、貞久は、次男の貞利に駒野城を譲り、自分は継嗣貞家やその他の子供たちを連れ今尾城へ入城した。永祿十一（一五六八）年、継嗣貞家が戦死すると、貞利が継嗣となり今尾城へ入城、代わって駒野城は三男である貞秀に与えられた。後に貞秀は庭田城へと移り、駒野城へは五男貞友が入城している。貞久は、天正一〇（一五八二）年、本能寺の変で信長が死去し、その後清洲会議の結果により美濃国が信長三男織田信孝の領地となると、そのまま信孝に仕えた。もともと、すぐに隠居したようで、駒野古城に居住して入道無楽と称し、天正十二（一五八四）年三月に死去したという。

貞久の跡を継いだ貞利は、天正一〇（一五八二）年、徳川家康が穴山信君と共に安土へ赴く途中で今尾に立ち寄った際に今尾城において家康を馳走し、その礼に馬などを拝領したという。その直後に本能寺の変が勃発し信長が死去すると、信長の仇を討つために挙兵した家康が、貞利に今尾城を明け渡して自分に味方するよう要求してくるも、明智光秀が秀吉に討たれたため沙汰止みになっている。賤ヶ岳の戦い

後、貞利は新たに美濃国の領主となった織田信雄に仕えた。天正十二（一五八四）年の小牧・長久手の戦いでは、豊臣秀吉から誘いがあつたが、信長以来の織田家への恩義や家康が信雄に味方していることからこれを断っている。この話を聞いた家康は、貞利へ馬を下賜したという。天正十八（一五九〇）年、豊臣秀吉により信雄が改易されると、貞利も領地を没収され、弟達と共に浪々の身となる。貞利は、弟貞秀・貞友・貞俊（実は貞利兄貞家の子。父死後、祖父貞久の養子になっていた）を連れて甲斐国の加藤光泰を頼り甲斐に寓居した後、文祿四（一五九五）年に今尾城時代の交際を伝手に家康に召し出され上総国で知行一〇〇〇石を拝領する。そこで、これを機に弟達を連れて江戸に居を移す。慶長二（一五九七）年に知行五〇〇石加増されると、三〇〇石を嫡男貞盛へ、残り二〇〇石を弟三人へ分知した。翌年、弟三人に加増がなされ、各人五〇〇石を領するようになる。慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の戦いでは、美濃での道案内を申しつけられ、嫡男貞盛や弟貞友・貞俊と共に恙なく勤めている。戦後、その功績により多良・時で貞利は知行二三〇〇石を、同じく貞友・貞俊はそれぞれ一〇〇〇石を拝領した。また、家康から山の中に一揆などが籠めると鎮圧しにくい場所なので、領地に居住するようにと命じられた。当時、山賊・キリシタンが多かったが、高木三家はこれを平定した。「高木系譜」にはこのように書かれている。

さて、「高木系譜」には、勘解由家の祖である貞秀について以下のように記している。

三男 始勘解由  
勝兵衛貞秀  
天文廿二癸巳年於駒野城出生  
母同上

始永祿十一戊辰年濃州駒野城貞利二讓請、居城トス、後貞友へ譲リ、同州庭田城へ移ル、天正十八年貞利二隨身、美濃国退去、甲斐国主加藤光泰へ寄客、文祿四年貞利御当家へ被召出、上総国ニテ千石拝領、兄貞利二隨身江戸表ニ同居、慶長二年於同国御加増五百石貞利拝領、内三百石嫡子貞盛拝領、貳百石、舍弟貞秀・貞



友・貞俊三人へ分地、依テ知行六拾六石余ニテ貞利ニ随ヒ御軍役勤来ル処、同三年御加増都合五百石高二被成下、知行所国郡之名難相分、其後奉蒙御勘気、仕于松平肥後守利長、加賀二子孫有之、江戸離散之年月不相分、寛永元甲子年六月廿日卒、享年八拾貳歳、法号浄信院常応西念浄入居士、墓ハ加賀金沢公儀町正福寺ニ有之

右によれば、貞秀は、始め勘解由といい、後に勝兵衛と改名した。永禄十一（一五六八）に貞利から駒野城を譲り請け城主となり、後に弟貞友に駒野城を譲って、庭田城主となった。天正十八（一五九〇）年に貞利ら兄弟と共に甲斐へ赴き、貞利が徳川家に召し出されると貞秀も江戸に下り、貞利の家に同居した。慶長二（一五九七）年、貞利から他の弟同様に知行六六石を分知され、翌慶長三（一五九八）年には加増されて知行五〇〇石となる。ただし、どこに知行を与えられたかは不明である。その後、家康の勘気を蒙り浪人となった後、加賀藩二代藩主前田利長に仕えた。加賀に子孫がいる。江戸を離れた時期は不明である。寛永元（一六二四）年六月二十日に死去した。戒名は浄信院常応西念浄入居士で、墓は加賀金沢公儀町正福寺にある。このように記されている。

さて、この記述は、先に紹介した勘解由家の由緒書（以下、明治三年本）の内容と矛盾する箇所が二点見られる。一点目は、明治三年本では、貞秀が仕えた加賀藩藩主が三代利常であるのに対し、「高木系譜」では二代藩主利長に仕えたとする点である。利長は、慶長十九（一六一四）年五月、大坂冬の陣を前にして死去しており、明治三年本に書かれている通り元和二（一六一六）年十二月に貞秀が加賀藩に仕官したとすれば、利常に仕えたとするのが正しい。したがって、この点は「高木系譜」が誤っていると思われる。二点目は貞秀の通称（仮名）である。明治三年本では、勘解由の名で加賀藩に仕えていたとするのに対して、「高木系譜」では勘解由、勝兵衛の順番で名乗ったとする。これは先述したように元和期の加賀藩分限帳に「高木勘解由」と記載されていることや、貞秀の子久明が勘解由の通称を引き継いでいることを踏まえるならば、明治三年本の通り貞秀は、加賀藩に

おいて勘解由を名乗っていたと見てよいと思われる。したがって、この点も「高木系譜」の方が誤っているとみて良いであろう。このように「高木系譜」には、一部誤りがある。ただし、その一方で、「高木系譜」には、貞秀の死去した命日、戒名といった明治三年本には記述されていない事項が書かれている。

さて、「高木系譜」に書かれたような西高木家の貞秀認識は、どのように出来てきたのであろうか。当初からこのように西高木家に伝わっていたのであろうか。この点について考察してゆきたい。次に示唆を与えてくれる、五点の史料をあげる。

#### 史料2

（表題）

「多良高木家譜略

（中略）

享禄元子の宝暦十一已迄三百三十四年成ル

貞久三男勝兵衛貞秀、後勘解由という、信雄公に仕えて庭田に居けり、慶長三年 御当家へ仕えまりて武州にて五百石賜りぬ。故有りて御勘気を蒙り濃州に來り、後賀州中納言利常卿仕へて子孫今に賀州に有り（後略）<sup>14</sup>

#### 史料3

（表題）

「文化八年閏二月 系譜之内尋之趣御答書」

（中略）

（朱書）

「貞利舍弟高木勝兵衛貞秀譜難相分候二付、彦左衛門貞久子共出生順相認候」

（中略）

三男 勝兵衛貞秀

始住于濃州庭田、貞利美濃国退去、其後同居仕罷在候、慶長二年被召出、上総国二而知行六十六石余拝領仕候、同三年御加増、都合五百石高被成下候、知行所国郡名難相分候、其後奉蒙 御勘気、仕于松平肥前守利長、加州二子孫有之由、江戸離散之年月難相分候



(以下略)<sup>15</sup>

史料4

御初代

覚林院様御三男

始勘解由

勝兵衛貞秀侯

(御家也) 御兄貞利侯御拝領之内式百石ヲ貞秀侯・貞友侯・貞俊御兄弟御三人御分地六十六石余ニテ御兄貞利侯江御随ヒ御軍役御勤之處、慶長三年御加増、都合五百石高被成下、知行国郡名ハ難相分候、其後此貞秀侯蒙

御勘気、御離散年月不相知、加賀ニ御子孫之有之御家也

此国郡名不相分候、御知行ハ若本文慶長年中土岐郷之内ニ而御加増有之事哉、不相知候、年齢内々慶長年中ニ付記出ス<sup>16</sup>

史料5

覚

始濃州駒野城主

後同国今尾城主

一高木彦左衛門尉貞久

始勘解由

三男 高木勝兵衛貞秀

天文年中於駒野城出生、盛人<sup>(成)</sup>之後父貞久ニ随ヒ并兄弟与共ニ数度有戦功、天正年中濃州庭田城主、慶長三年 神君江被 召出、同年中蒙

御勘気江戸離散、其後仕于松平肥前守利長、右者此表系譜之内荒

増拔書ニ御座候

今度御問合、左之通

一江戸御離散之御年月

一何年中ニ其表江御越

一其表江御越迄之内何方江御在居

一慶長三年從 神君御知行御拝領国郡御書付之御本紙御所持御座候

哉、右御書付之写借用申度候但シ此御書付之御名所文字高木庄兵衛殿与可

有御座候

一御享年何十歳ニ而御卒去

一御法号

一御宗旨

一何寺江御葬

右等之御年月日

右之通古御由緒之御事ニ付及問合候事<sup>17</sup>

史料6

覚

濃州高木平兵衛尉貞盛公御女、井上清左衛門重成室

一御引移年月相知不申

一御俗名相知不申

一御行年相知不申

一延宝四年十月廿五日御卒去

一御法号者 智照院殿松誉栄心大姉

一井上家者金沢町禪宗松月寺旦那二候所、其節之御遺言候哉、金沢町

浄土宗法船寺江御葬、御墓同寺ニ有之候

右御問合之内伝承之ケ所相調申候事

加州井上乙吉内

壬午正月

角間牛兵衛

山田孝三郎<sup>18</sup>

史料2は、宝暦十一(一七六一)年に西高木家七代目当主篤貞により作成された由緒書下書である。本史料は、高木家の起こりから筆をおこし、美濃に始めて居をおいた貞政、その子貞次、その養子貞久、貞久の子供達、すなわち高木三家の初代や貞秀ら、そして西高木家二代貞盛から六代貞輝までの事跡について記している。本史料を篤貞が作成しようと思いついた契機は不明である。ただし、名順について東高木家と北高木家との間で争いがあったようで、宝暦四(一七五四)年に先に家督を継いだ者の名前を先とするとの約定が両家で結ばれている。この頃から三家間で家格争いが起こりつつあった。このような

状況と、本由緒書が西高木家を本家と記していることから考えるに、今後起きる可能性のある本家・分家問題に備えて篤貞が作成したものと推測される。ここでは貞秀に関する部分のみ抜きだした。これが現在確認できる所では、貞秀の名前が確認できる一番古い由緒書となる。なお、西高木家はこれ以前にも寛永十八（一六四一）年と慶安元（一六四八）年に由緒書<sup>20</sup>を作成しているが、どちらも西高木家初代貞利やその子貞盛の徳川將軍家への奉公に主体をおいたもので、貞利の兄弟達については、大部分「其外兄弟」「高木一類」などといった極めて簡単な書き方がなされるにすぎない。わずかに、天正十八（一五九〇）年の小田原合戦で貞利が東・北両家初代と共に夜討ちに参加して、三人とも負傷したとする記述に貞友・貞俊の名が見られる程度である。貞秀の名はこれらの由緒書には見られない。

さて、史料2で注目したいのは、貞秀が最初勝兵衛と名乗り、後に勘解由と改名したこと、後に前田利常に仕えたことの二点である。この記述は高木勘解由家が作成した明治三年本の記述と同一である。さらに、史料1では「知行所国郡之名難相分」とされた慶長三（一五九八）年に貞秀が徳川家から与えられた知行五〇〇石の所在地について武蔵で与えられたと書いている。また、勘気を蒙った後、貞秀は美濃へ戻ったとも書かれている。あるいは関ヶ原の戦い以後、貞秀は高木三家と共に多良に居住していたのかもしれない。いずれにせよ、後の由緒書において誤っている事項や不明とされる事項について、宝暦段階までは西高木家に比較的正しく伝わっていたことが確認される。

これが五十年を経て文化八（一八一）年になるまでの間に改変されて伝承されることになる。史料3は『寛政重修諸家譜』編纂に伴って以前幕府へ提出した「系譜」の内容について文化八年に幕府から質問を受けた西高木家が提出した返答書控から貞秀部分のみ抜き出したものである。ここでは貞秀の通称は勝兵衛のみで勘解由についての記述はなく、彼を召し出した加賀藩藩主名は史料1と同様に前田利長となっている。ここに、宝暦期とこの時期までに記憶の断絶があったことが確認されるのである。

史料4は、貞秀の経歴を書いた書付で、これで全文である。貞秀の通称の名乗順や彼を召し出した藩主は史料1と同様で、誤って書いて

いる。この文書では当時の東高木家当主を藤兵衛、北高木家当主を玄蕃と書いていることから、文化八（一八一）年に玄蕃貞金が北高木家の家督を継ぎ、文政六（一八二三）年に東高木家当主藤兵衛貞直が隠居する間に作成されたことが確認される。現在、この間に作成された由緒書としては、文化八年に幕府へ提出した系譜（史料3）と文政五（一八二二）年に作成した「高木系譜」（史料1）が残されている。史料4では貞利・貞秀ら高木一族に敬称が使われているので、幕府へ提出する系譜作成に関係したものとは考えづらい。したがって、史料4は「高木系譜」（史料1）を編纂するにあたって作成されたと考えるのが妥当であろう。慶長三（一五九八）年において貞秀が宛がわれた知行地の所在について慶長年中に土岐郷で加増を受けたと本文（何の本文であるかは不明）にあると書くなど、大いに混乱している様子がうかがわれる。

また、史料4では、史料1に書かれている貞秀の死去年、戒名や菩提寺については書かれていない。この段階ではこれらの情報を西高木家は得ていなかったのである。この情報を手に入れるために作成されたと推測される質問状の控が史料5となる。宛名はないが内容から加賀藩の高木勘解由家へ宛てたと考えて間違いない。この史料5に対する勘解由家からの返答を参考にして史料1は作成されたのである。

ところで、史料5では、貞秀の通称の名乗順や彼を召し出した加賀藩主名を利長と間違って記している。これを勘解由家へ送付したとするならば、勘解由家からなぜ指摘がなかったのだろうか。推測にすぎないが、勘解由家が質問事項のみに単純に返答した可能性が想定される。江戸時代前期に加賀藩士井上清左衛門に西高木家二代高木貞盛の娘が嫁いでいる。西高木家は、「高木系譜」作成にあたり、彼女の情報を手に入れるために嫁いだ時期・俗名・死去年・戒名・菩提寺などについての質問状を井上家へ送った。史料6はその質問状に対する井上家からの返答状である。これを見ると、西高木家からの質問事項のみに簡潔に返答している。これと同じような返答状を勘解由家が送ってきたのではなからうか。そうであれば、誤りが正されなかったのも肯首できよう。もっとも現状では確定するだけの材料がない。し

たがってこの点については不明とせざるをえない。

以上、西高木家における高木貞秀についての認識の変化について見てきた。まとめると以下の通りとなる。西高木家において宝暦期まで貞秀について比較的正しい情報を保持していた。ところが、これが幕府による『寛政重修諸家譜』編纂時にはすでに失われてしまっていた。もともと、この段階では加賀の高木勘解由家に問い合わせは行わなかった。その後、文政五（一八二二）年に「高木系譜」を作成するにあたり、加賀藩の高木勘解由家や井上家を始めたとした先祖の縁家など関係諸家に問い合わせをしている。『寛政重修諸家譜』編纂に伴う系譜差し出し時は調査もせずに差し出しているのに対して、「高木系譜」編纂時には調査を行っているのである。ここから、西高木家が自家の系譜の一応の決定版として「高木系譜」を作成しようとしたと理解できる。しかし、調査を経ても貞秀について間違った情報は正さず、「高木系譜」においても誤ったまま掲載されてしまったのである。なお、弘化三（一八四六）年、幕府による系譜改めが再び行われると、西高木家は伝来する由緒に関わる書状類の写を入れ込んだ新たな由緒書を作成する。西高木家は、この由緒書編纂に伴いより正確さを求め先祖の縁家などに問い合わせを行っているが、貞秀に関しては「高木系譜」の記載をそのまま踏襲している。

## おわりに

本稿では、金沢市立玉川図書館近世史料館に所蔵されている高木三家初代達の兄弟高木貞秀を祖とする高木勘解由家の由緒書を紹介すると共に、この由緒書と西高木家に伝来した由緒書類を使って貞秀に関する記述の変遷を明らかにした。そして、そこから西高木家の由緒書編纂の一端を見てみた。

今回は、あくまで貞秀に関する記述に絞って考察したため、西高木家の由緒書編纂のあり方全体を明らかにするにはいたっていない。また、本家・末家を巡る高木三家の意識の違いなどについても扱えていない。これらの点については、今回明らかにしたことなどを踏まえて、研究を進展させる必要があると考える。

## 注

- (1) 現在、西高木家に伝来した文書は、名古屋大学附属図書館所蔵分以外に、大垣市が所蔵する福長氏旧蔵西高木家文書など個人・他機関が所蔵するものも少なくない。
- (2) 名古屋大学附属図書館・高木家文書目録刊行調査室編『高木家文書目録』四（名古屋大学附属図書館、一九八一年）。
- (3) 石川寛「旗本西高木家伝来の黒漆文庫の復元」（『名古屋大学附属図書館研究年報』十四号、二〇一六）。
- (4) 同右。
- (5) 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵加能越文庫16・31-065-5212。
- (6) 金沢市立玉川図書館近世史料館編集・発行『加賀藩侍帳』下（二〇一九年）四一四頁。
- (7) 加能越文庫右16・31-065-5203。
- (8) 『寛政重修諸家譜』卷三二〇（『新修寛政重修諸家譜』5 四〇九〜四一八頁）。ただし、西高木家は、少なくとも寛永期までは鷹之羽三つ紋を使っている（高木家所蔵文書1-1）。それを踏まえるならば左違鷹の羽は、もともととは高木家分家の家紋だった可能性がある。
- (9) 「元和之侍帳」（石川県図書館協会発行『加賀藩初期の侍帳』（一九四二年）四九〜八六頁）。本書では元和元（一六一五）〜二年頃のものとするが、末尾に元和四（一六一八）年に生まれた前田利治附の家臣名が追加で載せられていることから、最終的な完成は元和四年以降と考えられる。
- (10) 金沢市史編さん委員会編『金沢市史』資料編4（金沢市、二〇〇一年）六七頁。
- (11) 金沢市史編纂委員会編『金沢市史』通史編2（金沢市、二〇〇五年）二七五〜六頁。
- (12) 同右二七一〜二頁。
- (13) 上石津町編纂・発行『上石津町史』史料編（一九七五年）二八〜四七頁。
- (14) 高木家所蔵文書35。
- (15) 名古屋大学附属図書館所蔵高木家文書F1-1-15-1。以下名古屋と記載。
- (16) 名古屋D-2-1-150-1。

- (17) 福長氏旧蔵西高木家文書5-15。以下、福長と記載。
- (18) 福長5-160。
- (19) 名古屋F-1-1-36-あ。
- (20) 寛永十八(一六四一)年成立の由緒書は高木家文書所蔵文書1-いなど。  
慶安元(一六四八)年成立の由緒書は高木家所蔵文書3-あなど。
- (21) 名古屋F-1-1-7。